



大正3年頃 上伊那農学校（現 上伊那農業高校）の松山犁による犁耕実習

明治28年5月に長野県最初の農学校として開校したのが上伊那農学校です。後に信州大学農学部へ昇格する県立農林専門学校は、上伊那農学校に併設し始まっています。

松山原造は明治25年に開校した小県蚕業学校（現 上田東高校）や明治43年開校の上田蚕糸専門学校（現 信州大学繊維学部）をはじめとする主要農学校で犁耕教習をし松山犁の普及を図りました。

1. 上伊那農学校犁耕実習表紙
2. 長野県の犁製造者 その二 2～6
3. 報告事項..... 7～8

長野県の犁製造者 その二

学芸員 田中 壽子

大正十五年 「改良農具二関スル調査 長野県」より抜粋

松山記念館に「大正十五年改良農具二関スル調査 長野県」という小さな薄い冊子があります。県の内務部農商課が改良犁・脱穀機・製縄機の普及状況を調査した統計書です。これによって大正末期までの長野県内の犁普及のようすを知ることができます。

第一位は松山犁で六、九六三台、以下に上田の上田犁（一、三九五台）・稲荷山の山崎犁（五二八台）に次いで安曇野の鳥羽犁（五二二台）、諏訪の植松犁（四六〇台）、松本の波多犁（四三〇台）、下高井郡の藤澤犁（二七〇台）が追っています。

明治二十五年に長野県が福岡農法を導入して抱持立犁が奨励されました。ここから犁を使った馬耕が県下で始まります。明治三十四年に特許を取得し創業した松山犁をはじめ、明治二十五年から大正十五年までの普及創成期は別表に見る通り、この三十五年間に多数の製造者を生み出しました。

館報の前号で中野の井上犁、安曇野の古川犁（鳥羽犁）、松本の筑摩犁の調査をして報告しましたが、本号では更級郡稲荷山町の山崎犁と諏訪郡本郷村の植松犁を取り上げます。

山崎犁と植松犁の製作・販売がどのように始まったのか、縁者と製造地を尋ねまた記念館収蔵資料から当時のようすを読み解きたいと思えます。

稲荷山の山崎犁

山崎犁は、更級郡稲荷山町（現千曲市稲荷山）の山崎保平（明治十四年—昭和九年）と娘婿の光伊（明治三十七年—平成十一年）が作った犁です。

山崎保平の祖父の代までは千曲川を隔てた鋳物師屋地籍に住み、保平の父 伊三郎は兄官三郎とともに大工をなりわいとし



抱持立犁（館蔵）

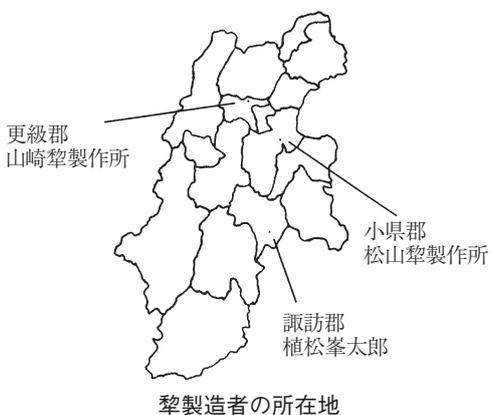
ていました。その後、兄の官三郎夫妻は稲荷山に移り官三郎が若くして没した後に再婚した利平は、遺児の今朝松を店主として引き立てながら提灯屋を営みました。「明治十年頃発行 稲荷山有力商店名鑑」に「提灯屋 山崎今朝松」の掲載があります。山崎提灯屋の商いを始める

のと前後して明治十二年に父伊三郎は稲荷山に移り、仕事の傍ら兄官三郎亡き後を扶助したそうです（官三郎の曾孫 山崎孝雄氏からの聞き取り）。兄官三郎の家が提灯屋の店を構えた経緯もあって、子の山崎保平の代で棒屋の店を稲荷山宿に開いたことと思われます。

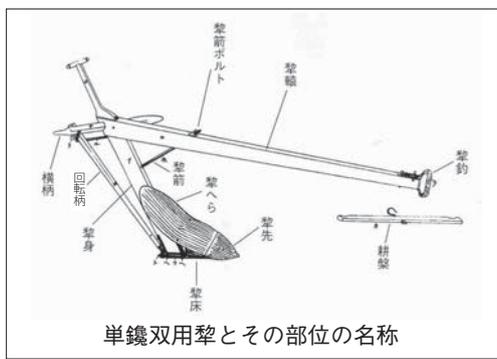
改良犁調	大正十四年末
松山犁	六九六三
不明	一五八二
上田犁	一三八五
山崎犁	五二八
鳥羽犁	五二二
植松犁	四六〇
波多犁	四三〇
藤沢犁	二七〇
小池犁	二〇〇
栗林犁	一八九
総数	一三、四七七台

郡市別改良犁調べ
更級郡
松山（二六九）山崎（四八）磯野（一）
北安曇郡
松山（九四）上田（三三）鳥羽（二五〇）山崎（二四〇）下高井郡
松山（八二）藤澤（二七〇）春山（二五四）武田（六三）上田（五九）井上（三五）抱持立（二五）福岡（二五）山崎（二）高山（八）押持（八）吉田（七）櫻井（四）ドグレス（八）ウ（二）秋澤（二）
上水内郡
松山（六四三）山崎（二二八）上田（六七）
下水内郡
松山（七八五）上田（一九二）山崎（五三）春山（二〇）北佐久郡
松山（六四）上田（一〇四）山崎（四七）八木澤（四）松島（二六）九州（九）野澤（二）吉田（三）依田（二）不明（七）上伊那郡
松山（二〇九六）上田（四九六）植松（一〇）上松（九）カ
ルチベーター（六）船底（三）山崎（二）不明（二五七）
諏訪郡
植松（四五〇）小池（二〇〇）松山（二〇八）

【関係郡のみ転載】



犁製造者の所在地



単鎌双用犁とその部位の名称

棒屋をはじめ

山崎犁を製造した山崎保平は（山崎棒屋）と稲荷山の人々に親しみを込めて呼ばれ、今も旧稲荷山宿を歩いて（山崎棒屋）と尋ねてわかる人がいます。棒屋は、鍬・鋤・天秤棒などに用いられる農具の柄を作った職人をよびます。保平の父、伊三郎の頃から棒屋をしていたか明らかにできませんでしたが、木の性質を熟知した保平は農具の柄を作り、稲荷山宿で店を構えて各種の柄を売っていたようです。

稲荷山の繁盛

稲荷山宿は、善光寺街道沿いの有力な宿場でした。善光寺へ参拝する人々は中山道追分宿（軽井沢町）から上田城下を経て善光寺平の南端の丹波島宿に至る北国街道東脇往還で向かうか、中山道洗馬宿（塩尻市）から松本城下を経て善光寺平南端の丹波島宿に至る北国街道西脇



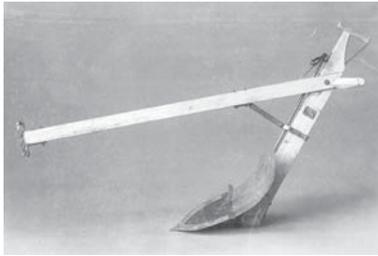
山崎保平
(山崎雄一郎氏 所蔵)

往還（別称 善光寺街道）を通りました。稲荷山宿は西日本からの善光寺参り客を最短距離で善光寺に導いたメインストリートにあつて、善光寺平への玄関口という交通上の優位さと五穀豊穡を祈願する参詣人の多かった八幡神社を背景に商業地として栄えました。ことに江戸時代後期から明治にかけて商品経済が発達して人の行き来が盛んになつてからは生糸・絹織物・木綿布をはじめ楮皮・瓦・醤油などの集散地となり、明治・大正

期には北信第一の商都と呼ばれました。

福岡農法の普及

そんな中で明治二十五年から福岡農法の導入がはじまり、鍬や踏み鋤を使って田畑を耕していた当時、犁という馬に引かせる耕耘農具の使用が奨励されま



「山崎轉換犁」
(山崎雄一郎氏 所蔵)

した。福岡農法を小県郡で農事教師として教えていた松山原造は、抱持立犁で土を均一に反転させていくには熟練した技量が必要だったので、農事教師をし

ながら使いやすい犁の試作を重ねました。明治三十三年秋に左右に反転できる構造をもった犁が完成し、翌明治三十四年十二月三日に特許四九七五号を取得しました。明治三十四年には九十台を製造し、明治三十五年六月和村（現 東御市和）に単鏡双用犁製作所を開業しています。

抱持立犁から山崎轉換犁へ

保平はまず、抱持立犁を改良した犁を製造したようです。

「大正二年四月 県立農事試験場主催農具試験概況」（長野県史 近代資料編第五卷（二））によれば大正元年十月に十二種の犁実地試験が行われ、松山犁をはじめ長野県内犁は植松犁・波多腰犁・古川犁・山崎犁の比較試験がされています。山崎犁は、価格が三円五十

銭。評価欄に「持立犁ニ改良ヲ施セルモノニシテ稍可ナルモ土塊ノ反転ニ不足ス」とあり、抱持立犁と近似した犁を製造していたことがわかります。

前出の山崎孝雄氏によれば、

昭和八年に創業三十周年を記念した祝賀会の案内通知が残っているということなので明治三十二年頃に棒屋として開業したこ

とが推し量れます。また『昭和七年 大日本商工録』（松山記念館所蔵）には、更級郡稲荷山町の山崎犁製作所が掲載されていて「創業 明治四十年」との記載があり、山崎犁・牛耕・除草機・稲扱機を製作していたことがわかります。くわえて『昭和四年 全国各府県農畜具店名 実用大覧』（松山記念館所蔵）には、長野県の部に「更級郡稲荷山町 山崎轉換犁製作所」との記載があります。

これらのことから明治三十二年頃から棒屋として農具の製造販売をはじめ、明治四十年から犁の製作を始めて昭和四年ごろには（山崎轉換犁製作所）を名乗り、昭和七年には（山崎犁製作所）と改めて商売をしていたことが推し量れます。

山崎保平の孫にあたる雄一郎氏（元山崎工業株式会社社長）は、所蔵写真の中から山崎犁にかかわる写真を探してくださいました。犁の写真は二点あり、一つには「改良松山犁 山崎犁製作所」と写真台紙に添え書きがあります。別の一つは添え書

きがないですが、大正三年に実用新案を取得した「山崎轉換犁」です。抱持立犁から近代犁に移行して改良松山犁を作りはじめ、その後独自に反転装置をもった山崎轉換犁の製造に切り替えていったと想像します。

いっぽう、松山記念館に収蔵する山崎犁は、それらと形態が異なります。犁床は抱持立犁のそれと同じ形状をして、松山犁と同じ反転装置を使っています。特徴的なのは犁へらの上端に犁箭を通す長円の穴をもった板金を付けることにより、犁へらの反転を安定させる機能です。また回転柄は下端に掘じりをかけた板金で強度を保持し、更に左右に切り替えた時には手元の板金のバネ機能で任意の位置に回転柄が止められる工夫がしてあります。

現存する山崎犁は今のところ



昭和9年山崎犁製作所店頭
(山崎雄一郎氏 所蔵)

ろ、記念館に収蔵するこの一点のみです。記念館に持ち込まれた際に、「山崎犁」の白墨書きがなされたようです。昭和十五年廃業までのどの時期に製造されたものか、はたして本当に山崎犁なのか今のところ確証はありません。類例を待ちたいところです。

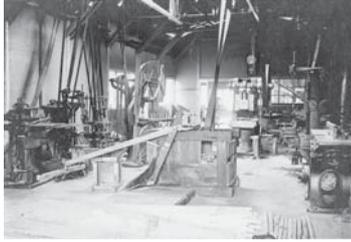
松山犁の販売者

米屋幸吉と田中商店

更級郡への松山犁の普及は、明治三十四年十月から始まっています。「自 明治三十四年一月

日計簿」「明治三十五年度売揚帳」(松山記念館所蔵)によると、宿場町稲荷山の米屋幸吉(山本幸吉)へ明治三十四年十月三日に特製犁代として四円五十銭で売ったのに始まりです。松山犁は明治四十年まで製品番号が付けられ「単鏡双用犁販売先一覧」に納付先が記録されていますが、最初に米屋幸吉に納めたのは製造番号三十九号の犁でした。米屋幸吉へは明治三十六年七月まで四台納めています。

通りに並ぶ田中商店(田中敬三郎)と



大正14年 山崎犁製作所機械部 (山崎雄一郎氏 所蔵)



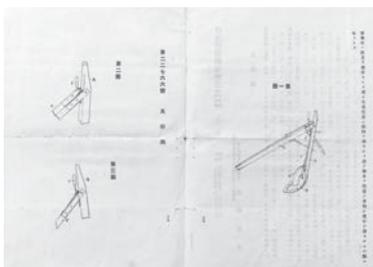
山崎犁製作所「改良松山犁」 (山崎雄一郎氏 所蔵)



山崎犁 広告チラシ (館蔵)



山崎犁 実用新案 31228号図面 (館蔵)



山崎犁 実用新案22766号図面 (館蔵)

は明治三十六年四月から取引が始まって、明治三十八年五月には特約販売店の契約を交わし明治四十年までに三十五台納めています。このように松山犁売上帳を追ってみると、米屋幸吉から田中商店に取引先の比重が移っていったことがわかります。田中商店は明治十九年に田中敬三郎が創業し当時は金物商で、現在は拠点を東京に移しガレージ・倉庫の専門メーカーのカクイチとして続いています。

山崎保平の犁製造と

松山原造の訴訟

明治三十四年から稲荷山での松山犁の販売がはじまって、同じ稲荷山で農具を製作していた山崎保平の目にも留まったのかもしれません。

まず、「改良松山犁」を製造したようで、大正二年七月の日

付のある写真には松山犁を模倣した犁が写っています。前述の「大正二年四月 県立農事試験場主催農具試験概況」報告書と合わせて推察すると、「抱持立犁を改良した犁」とともに「改良松山犁」も当時製作したようです。

その後「山崎転換犁」を製造し、販路を拡大しました。この犁は山崎保平が大正三年四月に実用新案第三二二二八号を取得したもので、実用新案の図面は松山原造が明治四十二年四月に追加特許として第一六一四八号を取得したものの権利範囲内であると訴訟したときの書類に綴られていたものです。原造は大正四年から大正五年に特許権利確認審判を提起していますが最終的に、山崎犁は独自の回転装置であるという判決がでています。

山崎犁の勢い

大正十四年の裏書のある山崎犁工場機械部の写真には、山崎転換犁と一緒に写っています。工作機械を新調した記念に撮影したのと思われます。裏書に書かれた設備から、山崎犁工場には木工用として角鑿・手押鉋・ホゾ取り・溝切り・帯鋸・丸鋸・帯鋸接合機・自動鉋機・丸棒削機、鉄工用として旋盤・パワープレス・鳥居プレス・グラインダー・大形ボール盤・送風機・ボール盤・原動力モーター五馬力・鉄切機械を備えて大規模に製造を始めたことが伺えます。

県下には山崎犁が五二八台も普及した大正十四年、山崎犁の成長期だったことが写真からうかがえます。「山崎転換犁」を製造して大躍進していたこの時、保平は十四歳でした。

犁から床材へ転向
保平の一人娘 なおの婿と

なったのが光伊です。埴科郡戸倉町(現 千曲市戸倉)に生まれた光伊は、伯父で塩田町(現 上田市塩田)に住む甲田熊次郎に師事し建築業に従事しました。上山田(現 千曲市上山田)で写真館や旅館を手掛けていた技量を山崎保平に見込まれて、昭和五年に山崎家へ婿入りしました。繁盛していた山崎犁の製造を手伝っていました。昭和七年に光伊は床材を加工販売する山崎木工所を設立しました。



山崎犁 (館蔵)

昭和九年七月に保平が他界し、光伊は山崎製犁作所を継承して木工所と兼営しました。昭和九年十二月の武水別神社（通称 八幡さま）の大頭祭に山崎光伊が施主となり練り物を奉納した時の記念写真を見ると、山崎製犁作所が大きな構えを持ち繁盛していたようすを知ることができます。

山崎木工所が時流に乗り活況となつたので、光伊は犁製造から昭和十五年頃には撤退したということです。その後、木工所は昭和二十一年に山崎工業株式会社と社名を改めました。戦後の建築様式の変化に伴ってフローリングの全盛期となり、床にデザイン性のある寄木張りをするモザイクパケット生産において国内トップのフローリング製造会社に成長していきました。

本郷村の植松犁

植松犁は諏訪郡本郷村（現富士見町立沢）の植松峯太郎（明治四年―昭和二十四年）が作った犁です。

明治四十四年五月に帝国農会は、農具改良を啓発するため日本中から改良農具を集めた全国農具展を特許局陳列所で行いました。千三百点が出品され、そ

の中の主要な農具を解説し、めたものが『日本農具図説』と『日本農具図説 図譜』（大正二年発行 館蔵）です。この図説に取り上げられた犁類のうち和犁は松山犁を含む四十六台で、長野県内では松山原造の「単鋤双用犁」・古川榮一郎（南安曇郡豊科村）の「古川式改良犁」・小澤富平（南安曇郡烏川村）の「水陸両用犁」・波多腰塚次（東筑摩郡波多村）の「便耕犁」とともに植松峯太郎の「稲田自在犁」が掲載されています。

図譜の構造解説によると、峯太郎の回転装置は犁床の後端上に板金を付けて、この板金には長い鉄棒の下端を曲げて取り付けたのを犁身に沿わせています。この鉄棒は轆を貫いて、更にその端を曲げて把手としています。この把手を左右に動かして犁床

を傾けることによつて、犁先と犁へらが接合部で屈折しながら土を反転させるといふものです。

植松犁を探す

『日本農具図説 図譜』の植松犁写真を頼りに富士見町で探してみると、富士見町歴史民俗資料館に植松犁が三点収蔵されていきました。一点には「信州国諏訪郡本郷村 植松峯太郎製作」「植松両用自在犁」「連合共進会三等賞」と犁身部分に焼印があります。これを含む二点は独自の回転装置があり、一方は植松犁を示す焼印はありません。別の一点は、松山原造が特許をとった双用装置を使用していることから松山犁の特許の切れた大正十年十二月以降に製作されたものと類推します。全国農具展に出品した「稲田自在犁」

には耕深を調節するために考えられた小車輪を付けていますが、富士見町に現存する植松犁は小車輪がないものばかりなの

で、明治四十四年の全国農具展以降に小車輪のないものに改良され製造されたようです。松山原造が発明した双用の装置を持った「単鋤双用犁」は、明治三十四年十二月三日に特許を取得して十五年の特許期間を終える大正五年に五年の特許延長を許可されています。双用の装置を持った犁は二十年間、松山犁が独占し製造してきました。松山記念館には、明治四十年から大正四年に認可された他社畜力犁特許・新案特許図面が二十件分、写し書きして残されています。その殆どが犁に双用の装置を取り付け、特許や実用新案を取得した製造者のものです。特許権権利侵害を訴訟するための資料として松山原造の顧問特許弁理士だった乙部俊次（東京市京橋区木挽町）が調査したもの

た植松峯太郎の特許第一二八八五号の図面がありました。峯太郎は独創の回転装置を考案して特許を取得したようです。

峯太郎の犁製造

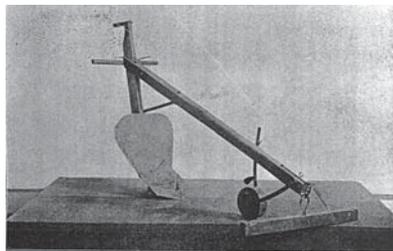
植松峯太郎の家は代々「角左工門」を名乗り、村での屋号としていました。峯太郎の孫 峯夫氏によると、家は「かざりや」とも地域の人々に呼ばれていたそうです。峯太郎は屋号「角左工門」の植松類作の長男として生まれました。小学校を出てしばらくして大阪か東京に出て飾り職人の修業をし、村に戻ってからは「かざりや」が通り名になつていたそうです。犁製造が繁盛するようになって、人を雇って犁作りをした時もあったようです。独自の回転装置を考案し特許を取得した明治四十年は、峯太郎が三十六歳の時です。

植松犁の隣家で育つた小池陽郎氏（昭和二年生まれ）によると、峯太郎は自分で山からエンジンジュの木を伐採してきて部材を拵えて、作業場には轡もあつて犁先をこしらえ犁や代車を作っていたそうです。家は田畑作や養蚕をしていましたが、農業は峯太郎の母と妻と娘の三人でこなし

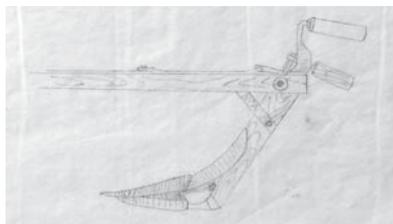
て峯太郎は犁・代車作りに専念



「植松両用自在犁」
（富士見町歴史民俗資料館 所蔵）



明治44年帝国農会全国農具展覧会出品の
「稲田自在犁」【日本農具図説 図譜】より



植松犁 特許12885号 図面（館蔵）

していたそうです。無口で一意
専心な仕事ぶりだったようです。
孫の峯夫氏（昭和十三年生ま
れ）は晩年のようすを記憶して
います。峯夫氏が小学生だった
昭和二十二（三年）ごろ、高齢に
なり犁は作らなくなつて、犁や
代車の修理を轡の火を起こしな
がらしていたそうです。

植松峯太郎は昭和七年三月
十一年二月まで本郷村の村長を
務めています。六十一歳から六
十五歳頃まで村の要職を務めた
後、七十八歳で亡くなる晩年ま
で自身の製作した犁の修繕を責
任もつてやり通していることは、
一筋に農具造りをしてきた姿と
重なります。

松山犁は諏訪郡での 犁講習会から普及

諏訪郡への松山犁の普及は明
治三十六年に始まっています。
「明治三十五年度売揚帳」によ
ると明治三十六年四月二十七日
に原村柳沢の清水住作・清水金
良・牛山亘と中新田の菊地寛司
に、富士見村御射山の細川孝重、
本郷村乙事の五味植三郎へ発送
されています。

これは明治三十六年四月十六
日から四月二十七日まで松山原
造が諏訪郡長の山中助蔵に招聘

されて諏訪郡下で馬耕講習会を
行つたことに端を発しています。
山中助蔵は原造が小県郡の後、
埴科郡で農事教師をしていた時
に埴科郡長職にあつて、双用犁
を完成した時に実演を見に駆け
付けてくれて「大賛成ヲ得」た
と原造は日記に喜びを記してい
ます。この山中助蔵の推奨もあつ
て諏訪郡で犁耕の講義と実演を
しました。

「原造日記 明治三十六年」
をみると、本郷村では四月二十
四日に立沢区で翌二十五日に乙
事区で講習をしていて、原造は
二十五日朝に和村の単鑿双用犁
製作所に犁注文状を発送してい
ます。売揚帳によれば、二十七
日に本郷村・原村・富士見村に
向けて犁五台を出荷していま
す。驚くほど迅速に、諏訪郡で
の注文に応えていることも日記
と帳簿を照らし合わせることに
よつて知ることができます。

植松犁の使いやすさ

前掲の「大正二年四月 県立
農事試験場主催農具試験概況」
にある犁の価格欄をみると、松
山犁は五円五十銭・植松犁も五
円五十銭、波多腰犁は三円七十
五銭、古川犁は三円五十銭・山
崎犁も三円五十銭とあります。
植松犁は松山犁と同額で他より
高い値段で売っています。試験
評価は、十二点（県外七点・県
内五点）の試験犁のうち松山原
造の「単鑿双用犁」と松山乙松
の「自由回転犁」（石川県）に
次いで高く「その形は松山犁と
大同小異だが、耕度やや浅く土
塊の反転も劣る」と評されつつ
も、松山犁・乙松犁・植松犁の
三点が耕耘に適する犁として推
奨されています。

植松

犁は、
富士見
町歴史
民俗資
料館所
蔵の犁
の焼印



植松式双用犁（富士見町歴史
民俗資料館 所蔵）

にみるように共進会に出品し
て、真価を認めてもらう積極的
な取り組みもしています。農具
の品評会である共進会への出品
で評価を得ることによつて、販
路を拡大しようと努めていたこ
とを伺い知ることが出来ます。
大正十四年末までに諏訪郡を
中心に四百六十台をほぼひとり
で製造販売していた峯太郎の犁
作りのようすが見えてきました。

おわりに

山崎保平と植松峯太郎の犁製
造の経緯を調べてみると、両者
とも松山原造の単鑿双用犁の同
地への販売から犁の製造が始
まったことを判知しました。い
ち早く双用の装置について特許
を取得していた原造は、山崎保
平や植松峯太郎の作る双用犁の
販売拡大に苦慮していたことが
弁理士の作成した資料からわか
がいが知ることが出来ます。特許
期限の切れた大正十年以降、県

下の犁製造者の躍進を注視して
いた原造の姿を改めて思い知る
ことができます。

本稿をまとめるにあたり、たくさ
んの方から情報資料をいただき、殊
に千曲市 四方山歴史会の泉光男
氏、富士見町立沢の文化財保護委員
の窪田和昭氏には調査についてのご
協力をいただきました。記して深謝
を申し上げます。

参考文献

- 『明治三十六年 職員録』
明治三十六年 印刷局
- 『官報 第七八号』大正元年
- 大蔵省印刷局
- 『日本農具図説』同 図譜
- 大正二年 帝国農会
- 『全国各府県農蚕具店名 実用大便
覧』昭和四年
- 『大日本商工録』昭和七年
大日本商工公編
- 『更科埴科地方誌 第四巻』
昭和四十二年
- 『更埴市史 第三巻』平成三年
- 『稲荷山四百年の歩み』昭和四十九年
- 『長野県人事録第十七版』
昭和五十二年 富士探偵社
- 『富士見町誌 下巻』平成十七年
- 『原村誌 下巻』平成五年
- 『立沢村の歴史』昭和三十三年



明治38年
諏訪郡本郷村での松山犁講習会
（館蔵）



植松犁の回転装置（富士見町
歴史民俗資料館 所蔵）



植松犁の犁底
（富士見町歴史民俗資料館 所蔵）

平成28年 記念館日誌

月日	曜日	内容・実施事項
1/15	金	丸子修学館高校、授業に来館
1/23	土	平成27年度、会計及び業務監査
1/25	月	図書受贈「農哲・林遠里の生涯」 長和町学者村の本山一城様より
2/5	金	第9回理事会
2/18・19	木・金	平成27年度博物館等関係職員研修会 (千曲市 長野県立歴史館)
2/25	木	第6回評議員会
2/26	金	一般財団法人三吉米熊顕彰会設立記念 講演会(実行委員)
3/29	火	図書受贈「常民へのまなざし」 金沢市の尾島志保様より
3/29	火	資料受贈「農業機械開発史総合1～3」 長野市の勝野和人様より
4/1	金	松山(株)新入社員研修来館
4/7	木	全国公益法人協会主催「公益社団法人・公益財 団法人のための定期提出書類作成講座」受講
5/1	日	はたらく馬フェス、第3回全国馬耕 大会参加(写真1)(写真2)
5/2	月	はたらく馬フェス、馬耕講習会実演 指導(写真3)

月日	曜日	内容・実施事項
6/22	水	図書受贈「林遠里と福岡農法」 長和町学者村の本山一城様より
6/30	木	長野県教育委員会宛「青少年を対象と した取組等に関する実績報告」提出
7/2	土	米熊・慎蔵・龍馬会 平成28年度総会出席
7/2	土	図書受贈「米熊・慎蔵・龍馬会 15年 のあゆみ」
7/5	火	上田第四中学校生徒、就業体験学習 来館
7/8	金	長野県立歴史館及び、真田宝物館視察 研修会(松山記念館役員参加)(写真4)
7/25	月	上伊那農業高校へ図書等寄贈 (贈呈式出席)(写真5)
8/23	火	井関農機(株)新入社員研修来館
8/26	金	更級農業高校へ図書等寄贈
9/5	月	南安曇農業高校へ図書等寄贈
9/7	水	塩川小学校へ研究授業用機械、資料の 貸出
10/13	木	館報「まつやま」発行
10/14	金	第25回文化講演会



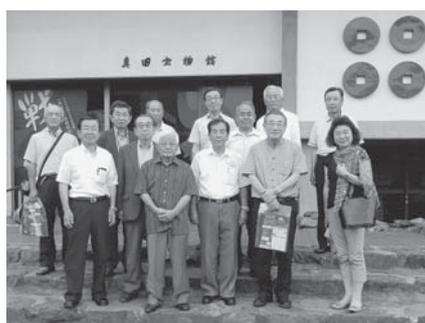
(写真1) はたらく馬フェス 第3回全国馬耕大会にて
八王子市高尾の森(5月1日)



(写真2) 松山犁の優勝旗を寄贈



(写真3) はたらく馬協会々員への西尾和実評議員によ
る犁耕実技講習(5月2日)



(写真4) 真田宝物館での視察研修
(7月8日)



(写真5) 上伊那農業高校
図書贈呈式(7月25日)

文化講演会開催

平成二十七年十月九日(金)松山記念館主催、上田市・上田市教育委員会後援で、松山(株)三階ホールにて、第二十四回文化講演会を開催しました。

講師に、農業生産法人 株式会社信州せいしゅん村 むらおさ 小林一郎氏をお願いし、演題『農村活性化の極意』―目指したこと・やったこと・知ったこと―をテーマとして講演された。

(聴講者一四一人)



講演会に先立ち、主催者を代表して林清弘理事が挨拶に立ち、今講演会のご後援をいただいた上田市、上田市教育委員会とご多忙のなか本日の講演をお引き受け頂いた講師にお礼を述べると共に今年の二月二十七日に行われた評議員会にて、理事長の松山信久氏が退任し新理事長に松山武氏が就任したことが報告された。小林先生が立ち上げられた農業生産法人信州せいしゅん村は、ベンチャー事業としても高く評価されています。本日は私たちに力を

与えてくれるご講演をいただけるものと期待をもっております。と挨拶をした。

続いて後援者を代表して上田市丸子地域自治センター産業観光課の横井久一課長が「今回の講演では総合的な農業振興策に関する先進的な取り組みの事例を聞けるものと楽しみにしている」と挨拶。

続いて講師のプロフィールが紹介され、講演に入った。

講師は、まず冒頭に「地元ではなかなか知っている方が少ないのですが、私たちの取り組みが先進的な取り組みかどうかということで、いろいろなか所で賞をいただいています。「日本農業賞」を受賞。その前にNHKさんが紹介してくれて受賞になったのですが三十分番組を作ってくれてなんとこれをNHKワールドで世界中に流していただきました。全国放送が一回、県内が一回、NHKワールドが一回ということ非常にたくさん送っていただきました。」と紹介されて講演に入った。

受賞歴 ・ JTB交流文化賞・オーライ・ニッポン大賞・日本農業賞・信州ブランドアワード大賞・長野県産業功労者知事表彰・観光部門 (講演要旨)

日本農業賞・食の架け橋賞 受

賞

信州ブランドアワード大賞の受賞

第十九回信毎選賞の受賞

目指したものの心の豊かさ

信州せいしゅん村の歩み

信州せいしゅん村の活動履歴

農業の現状

これからの農業・農村

サービス提供型農村

来て貰うには農村全体を使う

これからの観光

農村と観光、両者の現状

観光と農村の「コラボ条件」

求められる農村の《新観光》

せいしゅん村の理念・目標

活動のスタンス

〈活動から得られた教訓〉

従来型組織の反省

経営は営業なり

自分たちを売りこむ

成功させる秘訣

お客様を呼ぶ商品

本気で、本当にやりますか？

覚悟を決めましょう

〈これからの農業・農村〉

私たちの思い「観光を通して農村

社会を変えたい」「いつも全国モデルを志向している」「全国に広

め、世界中の農村振興に寄与したい」というのが私たちの思いで

す。台湾に向出したときに、私の

着る法被には日本地図が背中に

付いていて、それを見せながら「私

は日本を背負って立っています」

と話をしました。このくらいの気概をもって取り組んで行きたいと思っています。ご清聴、どうもありがとうございました。と締めくくられました。

理事会開催

★平成二十七年十二月十五日(火)協同サービス(株)二階ホールにおいて、第八回理事会が開催され、平成二十八年度事業計画書案・同収支予算書案・定例評議員会の招集について審議され、参加者全員の承認を得て終了した。

★平成二十八年二月五日(金)協同サービス(株)二階ホールにおいて、第九回理事会が開催され、

- ①平成二十七年事業報告書案)及び事業報告の付属明細並びに同収支決算書案)及び財務諸表等を、監事による会計監査報告の後審議され、出席者全員の承認を得た。
- ②定例評議員会の招集について平成二十八年二月二十五日(木)協同サービス(株)二階ホールにおいて、開催を可決承認。
- ③その他報告事項承認。

評議員会開催

★平成二十八年二月二十五日(木)協同サービス(株)二階ホールにおい

て、第六回評議員会が開催され、

- ①平成二十七年事業報告書案)及び事業報告の付属明細並びに同収支決算書案)及び財務諸表等を、監事による会計監査報告の後慎重審議され、出席者全員の承認を得た。
- ②その他報告事項承認。

松山(株)新入社員研修見学

松山(株)の平成二十八年度新入社員は、四月一日(金)の入社式終了後、当館を訪れ、松山(株)創業以来の犁及び犁の歴史を研修した。

平成二十七年当館見学者

開館日数 二八三日
見学者総数 六六一人
〈内訳〉
県外(含む外国) 八五・三％
東信 一二・九％
北信 一・八％

第二十五回文化講演会決定

日時・平成二十八年十月十四日(金)
場所・松山(株)三階ホール
講師・長野県林務部森林政策課 井出 政次 氏
演題・「みんなで支えるふるさと
の森林づくり」
〈森林・林業から見た
「信州の山」の魅力と恩恵〉